

参加者の感想

小池田 冬乃

私はもともと人前に出て発表することが苦手でしたが、去年と今年と、このスピーチコンテストに参加して少しずつ克服できていることが嬉しいです。スピーチコンテストを通して、私にとっては、プラスになることしかありませんでした。

韓国を訪問して、印象に残っていることは、英語村の体験プログラムに参加したことです。英語が上手な子たちとたくさん喋ることができたり、韓国の子たちと話す機会がありとても良い経験になりました。また、ソウルの南大門市場では、韓国ののりやお菓子などがたくさん売っていて印象が強かったです。

坡州市では、韓国近現代史博物館を見学し、戦前頃からの歴史を学び、日本と文化が似ていると感じました。また、烏頭山統一展望台などに行き、そこからの景色を見て、韓国から川をまたいで北朝鮮が見えました。私はそれを見て、いつもニュースで他人事のようにしか見ていなかった北朝鮮が目の前にあり、現実なんだと改めて気づきました。

日本との違いを感じたのは食べ物、環境、文化などです。食べ物はほぼ全て辛い物ばかりで汗が出そうでした（笑）。環境では、景色が曇っていて、日本よりもはるかにPM2.5の影響が大きいと感じられました。文化では、食べる時のマナーがご飯はスプーンで食べるなど日本と違ったりして慣れるのにとても大変でした。

スピーチコンテストで入賞できたことも嬉しいですが、副賞で海外訪問の経験をさせて頂き、行ったことの無い国へ訪問できたことの方が大きく、このスピーチコンテストに参加して本当に良かったなと改めて思いました。



小林 彩奈



スピーチコンテストには楽しんで出場することができました。控室や開始前の時間に他の出場者と交流できたのもとても良かったです。

私は英語学習が好きなのに英会話が苦手だから、英語村に対する不安が大きかったです。スピーチコンテストは多くの時間をかけて完成できたが、英会話の事前準備は十分にできなかった。実際に訪問してみると、ボディランゲージや簡単な単語で通じる部分が多く、自分の意思が相手に通じた時には達成感を得ることができました。

統一展望台では、望遠鏡を覗くと北朝鮮がすぐそばにあって驚きました。今まで北朝鮮に対して「怖い」というイメージがあったが、様々な資料を見たりビデオを視聴することでそのイメージが小さくなった。北朝鮮には美しい街並みと生活を営む人々がいること、南北統一を望んでいることを学び、平和のために南北統一がいち早く実現してほしいと思いました。そして、このことを知るために多くの人に統一安保施設を訪れてほしいと思います。

ソウルに訪問した時も若干の不安があった。PM2.5 や反日運動が連日報道されていたからです。だが、行ってみると現地の方は日本人である私たちに親切に接してくださったし、PM2.5 もマスクがあれば大丈夫でした。南大門市場は日本語が通じる人が多く、通じなくても英語で意思疎通ができたのでスムーズに買い物ことができました。今の日本で流行っているコスメやアクセサリーの中に韓国発祥のものがあることを知りました。韓国料理は予想より断然辛かったです。チヂミはもちもちしていて美味しかったです。焼肉も日本で食べる時より厚みがあり、目の前で焼いてくれるのでワクワクしました。

今回の訪問が私にとって初海外でしたが、今は最高の思い出だと言い切れます。沢山のことを学び、感じ、知り、思うことでこれからの生活や価値観に反映したいと思いました。



ミラー 優氣

スピーチコンテストでは、「自分が考えていることを自由に伝えることができる」といういい体験になりました。また、こういうことは将来海外で英語を話したり、スピーチをするときがあったら、とても役に立つだろうと思ったし、自分だけではなく他の人のスピーチで、ちがう意見が聞けて今後の課題や改善点を見つけることができました。

韓国に行く前に「坡州の人達とうまく話せるかな？」など心配していましたが、到着してみて、坡州の人と会って話してみても、意外と会話が進んで驚きました。また、坡州市はとても良い町で、秦野市のように都会のような田舎だという感じが第1印象でした。

今、休戦中の韓国と北朝鮮ですが、2つの国が朝鮮という一つの国だったのは、英語で知りました。そして、韓国へ帰れない人達がいるのを初めて知りました。最終的にたどりついた考えは、「平和がなければ苦しくなり悲しくなることが多い。」でした。これからも、韓国の平和を願いたいと思いました。

韓国の料理は、とても辛いものや少し辛い物などありましたが、どれもおいしかったです。英語村の授業では、日本とは少し違ったスタイルで勉強していてびっくりしましたが、とても面白かったです。宿舎の同じ部屋に泊まったルームメイトとはすぐに仲良くなり、とってもうれしかったです。日本に帰る飛行機の中で「もう終わりか」という気持ちになりました。

